

JET日本語学校の留学生受入れとその原点

大震災とその後 -ありがとう台湾-

学校法人JET日本語学校教務主任 得猪 節子

Setsuko Tokui

1. 震災が来た

(1) 3月11日の台湾で

「日本たいへんですね、地震が・・・」

本年3月11日早朝、台湾に飛んだ。午後、台北市内の留学センターに着くなり言われたものの、呑気に間の抜けた返事をした記憶がある。首都圏の交通は全面ストップ、仙台空港は閉鎖になったらしいと聞いてもにわかには状況がつかめず、夜、ホテルでテレビ画面を見て大震災と津波の想像を絶する規模を知った。奇しくも震災当日から1週間、学校説明のために台湾各地を回ることになったのだが、連日震災報道が続くなか、行く先々で声をかけられた。「子供いるか、だいじょうぶだったか、よかった」「日本だいじょうぶか」「がんばって」「こんな時でも日本人は順番を守って秩序を保っている」「必ず立ち直るから心配いらない」JET日本語学校とつながりのある人たちはもちろん、見ず知らずの人たちからも温かい励ましの言葉をいただいた。嘉義のある小さな日本語塾からは義捐金さえ預かった。空港へ向かうバスの運転手は無愛想な表情でトランクを下ろしながら、ガッツポーズでエールを送ってくれた。その後、台湾から別の国へ飛んで、はからずも街の人々の反応の違いをじかに感じただけに、忘れられない1週間となった。

(2) 日本の現状をどうやって伝えるか

4月期の新学期をひかえ、震災直後から学校に入学を延期あるいは中止したいという連絡が相次いだ。最終的には新入生の半数がキャンセル、在校生も4割が帰国し、前年度の半数以下の在籍数で3週間遅れの新学期が始まった。海外での震災報道は日本のそれと比して情報量が限られるうえに誇張されがちで、不安はあおられるばかりである。余震、原発事故にともなう放射能の影響、水や食糧の安全性、日常生活等どうやって日本の実態を海外に知らせるか。一日本語学校でできることには限りがあるが、手をこまねいてはいられない。JET日本語学校では次のことを行った。

① 3月26日、台湾で学生やその父兄対象に説明会を行った。

理事長金美齡が自ら台湾に出向き、来日に不安のある学生や親御さんの相談に直接応じた。急遽設けたもので参加人数は多くなかったが、来場者の一人は新学期開講に合わせて予定通り来日した。

② 日本留学中の学生の声を母語で海外発信した。

日本留学に不安を感じている留学希望者にとって、一番説得力があるのは現に日本で普通に生活している留学生の生の声であろう。春休みや一時避難で帰国していた学生が戻り始めるのと同時に取材を行い、発信をおこなっていった。

ウェブサイトで

卒業生、在校生に母語（と日本語）で日常生活のことや進学先のことなど 1、2 分で語ってもらい、動画撮影したものを順次本校ウェブサイトに掲載していった。学生達も快く応じてくれた。さらに、日本をはじめ、学生出身地の海外主要都市の放射線量（公的機関発表のもの）も掲載した。

本校ニュースレター『JET通信』で

全校生徒に母語（と日本語）で海外日本留学希望者あてにメッセージを書いてもらい、「大丈夫だよ、ニッポン！」と題して「JET 通信」に掲載し、海外発送した。

③ 入学予定であった学生達に個別に手紙を送った。

震災から 2 カ月経過し、日常生活が落ち着いてきた頃、入学予定だった学生、休学した学生、来日を延期している学生に手紙を送り、東京の近況を知らせがてら、来日を呼びかけた。特に在校生で再入国を延期していた学生で、この手紙を読んで日本に戻ることを決めた例が複数あった。

（3）どうやって謝意を伝えるか。日本語学校の役割とは。

震災後、各国から救援隊はじめ物心両面の支援が続々と被災地に送られた。本校でも震災直後から多くの卒業生から学校の安否を問うメールやてがみが届き、さらに被災地への義捐金をどこに送ったらいいかという問い合わせもあった。震災直後から、学校ウェブサイトですぐ緊急の告知を行う必要があったが、中国語や韓国語、英語への翻訳では多くの卒業生が快く協力してくれた。真夜中に依頼しても明け方までに完成させてくれたことさえあった。卒業生が古きから新しきまで、震災の報に接し、母校および教師たちの安否を気遣い、惜しめない協力をしてくれたのである。まことにうれしく、ありがたく、心強かった。そして、この小さな日本語学校でひとの絆が築かれ、国際交流が行われている手ごたえをあらためて感じている。

世界各国から寄せられた支援のうち、特に台湾からの義捐金は 170 億円を超えた。ダントツで世界一である。震災当日から 1 週間台湾に滞在し、現地でその温かい気持ちを直接感じた者として、ここにあらためて記しておきたい。本校は台湾と縁が深い。創立者である理事長金美齢は台湾出身の日本留学経験者でもあり、日台交流活動にたずさわって半世紀以上になる。学生の国籍割合も、1988 年創立初期をのぞき、この 10 数年、台湾人が最も多い。

日本人として、ぜひとも台湾にお礼を言いたい。しかも私たちは日本人であると同時に外国人と接する最先端の場である日本語学校にいる者である。それならば、日本語学校として、教職員として、今この時こそその更なる役割があるだろう。率先してできることがあるにちがいない。

「お礼を言いたいが、だれにどうやって言ったらいいのか」金美齢のもとには多くの日本人からメールや手紙が届き、思案のすえ、「ありがとう台湾」メッセージと日台の絆をデザイン化した T シャツを作って台湾で着てはどうかと考えた。折しも 7 月には日本学生支援機構 (JASSO) が台湾 2 都市で行う恒例最大の日本留学フェアがある。その T シャツを着て説明会に参加すれば、来場者にひと目で日本人の気持ちを伝えるこ

とができる。間に合わせられるだろうか。金がさっそくデザインに取りかかった。生地はあくまでも Made in Japan。出来上がったのは6月下旬だった。

今年の JASSO 日本留学フェアが「謝謝台湾」を大きく打ち出して行われ、台北と高雄の目抜き通りでその幟が翩翻とひるがえっていたのは台湾でも話題になり、日本にいる留学生の間でも関心が高かったのはうれしいことだった（台湾人からの企画提案だったことを後日知って、不甲斐ない思いもしたが・・・）。説明会会場でも校長はじめ、応援に駆けつけてくれた卒業生達とともに「ありがとう台湾」Tシャツを着て、来場者に謝意を伝えつつ、学校紹介を行った。翌8月にまた別の留学説明会で台湾へ行ったときも着用し、交流のよいきっかけになった。ある1日、台湾中部、南投縣の瀟洒なコーヒーレストランを訪れる機会があった。若い店長自ら自分の農園でコーヒーの木を栽培、収穫、焙煎して提供しているこだわりの店である。彼曰く、日本の震災に自分も義捐金を送ったけれど、よく考えたら1999年9月の台湾中部大震災の時、自分は日本からおくられた組み立て式の仮設住宅で過ごせて助かって今があるのだから、これは恩返しなんだ。だからこちらも「ありがとう日本」なんですよ、と。いちまいのTシャツから、さらに10余年さかのぼる因縁にまで話が及んだ。



謝謝台湾の旗：どうしても伝えたかったメッセージ



留学フェア台北：金美齡デザインの「ありがとう台湾」Tシャツを着て
校長とJETの卒業生達

2. JET 日本語学校の留学生受入れにあたって

(1) JET 日本語学校の現状

2008 年 10 月のリーマンショックにともなう金融危機以来、日本留学者数が減少を続けていたところへ、大震災および原発事故が追い打ちをかけた。本校は今期、創立以来最少の学生数であり、たいへん厳しい状況である。特に中国についてこれまで日本への送り出し国第 2 位であった韓国からの学生数がこの 3 年で 3 分の 1 に激減し、本校も韓国人学生がめっきり減った。学生の国籍割合はこれまで台湾と韓国がほぼ半数で、日本語が共通語となる環境ができていたが、中国語話者の比率が大きくなってそれが成り立ちにくくなっている。日本語能力向上にも早晩影響が出るだろう。新たに募集対象地域を広げてこれまで以上に力を入れていく必要がある。本校でもすでにその努力を始めているが、学生数増加に結びつくまでにはまだまだ時間がかかりそうである。

(2) 学校の知名度が上がるまで

学校を広く知ってもらうための手段としてウェブや紙媒体での広告や留学説明会の開催等、広報活動は欠かせない。留学センターとの付き合いも大切だ。しかし、それと両輪のように欠かせないことは日々の教育の充実と質の向上である。本校は、創立以来一貫して学生に「JET を選んでよかった、日本に来てよかった」と言ってもらえるような教育を目指してきたし、実際に多くの在校生、卒業生から直にそう言われてきた。それは教師として、学校としてもっともうれしいことばであり、励みとなっている。現に本校学生の約半数は OB や個人の紹介である。留学センター経由であってもすでに本校ゆかりのだれかによって情報を得てあらかじめ学校を決めて申し込んでくる者が多い。私たちのモットーが少なからず実現している裏づけともいえる。全体としてはおそらく 7 割程度がいわゆる口コミでの入学者であろう。日々の教育がよければ学生を通じて伝わり、結果としてよい学生が集まる。学生の質が向上すればそこでクラスメート同士、切磋琢磨がおこなわれ、さらにより循環を生む。好循環が軌道にのるまでにはたえざる努力の積み重ねと多少の時間がかかるが、それが学校の評判や知名度を高める基本であることはまちがいない。さらに言えば、教育の充実と質の向上には終点がない。

(3) 教育の充実と質の向上のために

ここでは本校で行なっている試みの中から主に 2 つ述べる。

① 大学院受験指導について

本校では大学・大学院志望者のための進学コースと、語学研修および専門学校進学のための日本語コースの 2 つを設けている。進学コースでは、近年、大学院進学指導の需要が高まっている。大学院（修士課程）受験のために欠かせないのは、日本語能力の向上と研究計画書の作成である。特に研究計画書を書くにあたっては専門の勉強をしながら研究テーマをしぼり、その方法を考え、それを口頭でわかりやすく説明できることが必須である。そこで、校内で大学院研究内容発表会の機会を 2 回設けている。この発表会に向けて学生たちは教師の個別指導の下、懸命の準備を行う。当日はクラスメートや大学院生（OB、日本人）、教師の前で発表し、質問や

コメントを受け、それをもとに計画書を練り直し、完成させていく。期限を意識して準備させるためにもたいへん効果的な行事である。彼らを指導するためには教師にも高度な力量が求められる。早稲田大学大学院講師である校長を始め、指導にあたる教師自ら自己研鑽に努めているのはいうまでもない。現職にありながら大学院に籍をおいて研究に励んでいる教師も複数いる。

②日本人学生との豊富な交流活動

日本語学校は留学生が日本に来て最初に生活を始める玄関口である。留学生は水先案内人である日本語学校の教職員を通して、日本人や日本社会を垣間見ているといえるだろう。しかし、ここはまだ日本社会そのものではない。日本語学校を直接日本人とつながれる風通しのよいところにするために、日本語を使わざるを得ない場をつくるためにも、本校では日本人大学生との交流活動に力を入れている。一回きりで終わってしまわないように継続的に交流し、結果として年間 20 回以上の活動を展開している。主に明治、青山学院、早稲田、法政、専修の国際交流サークルの大学生に来校してもらい、教室でグループワークを行っている。学校行事にもお招きする。そこで大学生活や入試情報を教えてもらうことで、進路を考えるよい刺激も受けているようである。大学生企画の校外でのイベントへの参加状況もよく、学校内外ともに交流活動が盛んである。

3. 学校をささえているもの

創立 24 年目を迎え、最も厳しい状況のなかにありながら、これまで築いてきたものについて思い起こしてみたとき、ひととのつながりが本校の教育環境に豊かな恵みをもたらしてくれていることにあらためて驚く。学校の財産とはひとであるといっても過言ではない。そして人づきあいと学校や会社等の組織、ひいては国どうしのつきあいは、その性格性質や信頼にもとづいて築かれるという点でとてもよく似ている。

在校生や卒業生、教職員たちは学校の宝である。JET 日本語学校には後援会があって、多くの校友や OB からの寄付や支援で成り立っており、学生たちを応援している。そのほか、本校では創立以来のおつきあいが続いている団体や個人がいくつもある。ほんの一例をいくつかあげよう。創立以来夏休みのホームステイプログラムで毎年学生を引き受けてくださっている湯河原国際交流協会が一番長い。参加した学生で、その後も家族ぐるみのつきあいが続いている例がめずらしくない。3 月の震災直後には 10 数年前の台湾人学生から安否を問う電話がかかり、避難するなら両親も了解済みだから台湾の家に来て、と言われたそう。プログラム期間中に一度は学校から教員が出向いて、学生たちの様子を見がてらファミリーたちとあいさつをする。「JET は先生が毎年来てくれてありがたい」と喜ばれ、交流もはずむ。静岡県焼津のホームステイプログラムも 10 年以上になる。留学生スポーツ交流協会では献身的なボランティアの努力で登山、スキー、フットサル大会等が行われ、16 年以上毎年参加している。板橋区立桜川小学校とは交流活動も 17 年目になる。神戸のクリーニング店、小村さんも開校時から、毎年学生のために服を集めてき

いにクリーニングして送ってくださっている。1995年の阪神大震災時には店が壊滅し、連絡が取れなくなっていたところをテレビ局が探してくれ、学生が学校で集めた見舞金を避難先まで届けた。1999年に台湾で大地震が起きたときはお返しにといち早く義捐金を届けてくださった。フルーティストの佐々木真氏夫妻は学生たちを15年以上毎年銀座の一流コンサートホールに招待してくださる。近所の不動産屋さんにはJETの学生であれば賃貸契約手続きを簡素化して便宜をはかってくださる。

ひとつひとつ手間ひまかけて学生を送り出し、戻ってくれば様子を聞き、礼状を書かせる指導も行っている。地域や学生たちの進学先との関係も然り、留学センターや紹介者との関係も同様である。お互いのことがわかり、信頼関係ができている相手であればいっしょの活動が円滑に運び、学生にとってよい状況がもたらされる。新たな縁もそこからつながり、広がっていくと信じているし、すでにいくつも実現している。時間をかけて築いてきた見えない財産をこれからも維持し、伝えて行くことは、実はとても心楽しいことである。JETも周囲から信頼される学校でありつづけたい。

このような状況の今こそ、教育とひとのつながりの原点にたちかえり、できる努力を続けていくことが私たちの日々のつとめである。